

心理学とその近接領域における家族研究に関する一考察

—— (1) 家族に関して見出される現象および (2) 家族の状況の 2 軸による分類から ——

荘島 (湧井) 幸子

1. はじめに

筆者は、湧井 (2006) および荘島 (2008a, 2008b) において、性別や身体に持続的に違和を感じ、自らを「性同一性障害者」と名乗り^{注1)}、望む性を生きようとする A さん (仮名、以下敬称を略す) とその家族について、彼らがともに生き、経験している世界を解明すべく、縦断的なインタビューを行ってきた。A と家族へのインタビューから、自己の物語や家族の物語を聴き取り、自己の形成プロセスや家族の関係性や経験世界を明らかにするナラティブアプローチの立場に依拠したこれらの研究は、家族を対象としている点から、家族研究として位置づけることも可能である。

20 世紀の家族研究は、立場を異にする 2 つの学問群を通じて発展してきたといわれる (山根, 1971)。山根 (1971) によれば、家族研究のうち、「1 つは集団ないしは文化を出発点とする学問、とくに社会学・文化人類学であり、いま 1 つは個人を出発点とする学問、とくに精神医学・心理学である。社会学の家族研究は多かれ少なかれ社会改良の関心に基礎づけられ、例えば日本の家族、農村の家族、中間階層の家族、あるいは外国の家族というように、全体社会・地域社会・社会階層あるいは文化・下位文化などにそれぞれ共通する家族や家族関係の一般的性格を明らかにしようとする。これに対して精神医学や心理学の家族研究は臨床的関心に基礎づけられ、社会や文化に一般的な家族よりは、むしろ個々の家族の分析から出発し、非行・神経症・精神分裂病などの家族の特徴を一般化しようとする」(p.11-12) ものである。山根 (1971) による家族研究の分類から、社会学研究に比べて心理諸科学では、それぞれの研究目標に照らして家族が副次的な対象としてしか扱われてこなかったといえることができる。

山根 (1971) のいうように、家族を対象とする学問

や視点には様々な次元がある。そこで本稿では、医学 (精神医学)、心理学、社会学の分野において、家族研究をレビューし、2 つの軸から分類する。本研究は、それによって、湧井 (2006) および荘島 (2008a, 2008b) における家族へのナラティブアプローチの位置づけを確認し、他の家族研究との相違点を指摘し、家族へのナラティブアプローチの有効性を論じるものである。

2. 家族研究を整理する 2 つの軸

本稿では、家族研究を整理する軸として、第 1 軸：家族に関して見出される現象と第 2 軸：家族の状況という 2 軸を設定し、家族研究の分類を行った。分類を行った結果、図 1. 家族研究の分類が作成された。

第 1 軸は、ある研究の中で明らかにすべき現象が何かを示す軸である。第 1 軸におけるベクトルの 1 つは、家族を取り巻く社会・文化およびある社会階層や文化に共通する家族の一般的性格というマクロな現象を明らかにする方向であり、逆のベクトルでは、個々の家族の構造・機能・関係性・システムというミクロな現象を明らかにする方向を向いている。第 2 軸は、研究対象となる当該家族の状況をあらわす軸である。第 2 軸のベクトルの 1 つは、家族が慢性的な危機的状況 (貧困状況、また障害や病いを抱えた家族) におかれていることを表し、逆のベクトルでは家族が安定した状況 (一時的な葛藤や問題状況を含む) におかれていることを表している。以下、順に述べていく。

はじめに、社会・文化ならびにある社会階層や文化に共通する家族の一般的性格というマクロな現象を明らかにする研究を概観する (第 1 象限、ならびに第 2 象限)。次に、個々の家族の構造・機能・関係性・システムというミクロな現象を明らかにする研究を概観する (第 3 象限、ならびに第 4 象限)。最後に、安定状況に

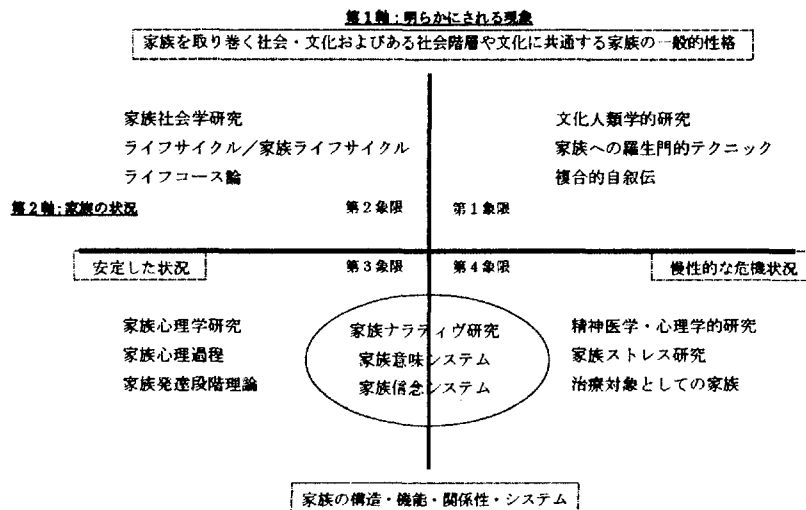


図1. 家族研究の分類

ある家族と慢性的な危機状況におかれた家族を対象とした家族研究として、家族ナラティブ研究を概観する（第3象限と第4象限をまたいでいる）。

3. 家族社会学におけるライフサイクルおよび家族ライフサイクルの発見

はじめに、第1軸における社会・文化ならびにある社会階層や文化に共通する家族の一般的性格というマクロな現象を明らかにする研究のうち、安定状況にある家族を対象とした研究を概観する。図1中、第2象限に位置する家族研究が、家族社会学研究である。家族社会学研究は、安定した状況にいる家族を対象として、社会・文化ならびにある社会階層や文化に共通する家族の一般的性格を明らかにする研究である。

家族社会学では、社会全体のなかで家族をその社会のシステムとして捉え、マクロな視点で、家族の歴史的变化をみる。家族社会学における重要な発見は、家族のライフサイクル (family life cycle) の発見である。近親者の小集団として共同生活が営まれる家族は、子どもの出産や、その成長と独立、親の老化や死亡というように、人の一生にかかわり続けるところにその大

きな特徴がある。それぞれの社会や時代によって、その社会成員の一生がどのような出来事と役割の変化によって形作られるかが決まっており、これをライフコース (life course) と呼ぶ。教育制度への関わり方、職業労働や労働市場への参入、大人社会への仲間入り、結婚と家族形成、労働からの引退など、人生上の節目となる出来事が社会的な制度や規範によって枠づけられているのである。

家族社会学では、家族は、家族のメンバーである家族成員がそれぞれのライフコースをたどるのを身近にいて見守り、支援しながら、お互いの生活と成長を支え合う人々の集まりとしてみなされる。また、家族という社会システムの特性として、一部の構成要素（家族成員）に変化（例、社会的役割の移行）が生じると、要素間の関係およびシステムに波及的に影響を及ぼすという性質がある。こうして、家族成員個々人のライフコースの束としての家族もまた、時間の経過の中で変化が生じる必然性が組み込まれていることになり、ここに家族ライフサイクルという観点が生まれたのである。ライフサイクルおよび家族ライフサイクルという概念は、家族研究の重要な観点の1つとなっている。

4. 「5つの家族」「サンチェスの子どもたち」にみる家族の複合的自叙伝

次に、第1軸における社会・文化ならびにある社会階層や文化に共通する家族の一般的性格というマクロな現象を明らかにする研究のうち、危機的状況にある家族を対象とした研究について概観する。図1中、第1象限に位置する家族研究が、文化人類学者の Lewis (1961/1986, 1965/1985) による家族研究である。危機状況にある家族を対象にして、社会・文化ならびにある社会階層や文化に共通する家族の一般的性格を明らかにしようとするものである。Lewis は、メキシコシティの下層共同住宅にひしめきあって暮らす一族の、破天荒のドキュメントを製作したことで有名であり、メキシコやプエルトリコでのフィールドワークをもとに、『五つの家族』(邦訳『貧困の文化—メキシコのく五つの家族>』)や『サンチェスの子どもたち』(邦訳『サンチェスの子どもたち—メキシコの一家族の自伝』)などを著した。

Lewis は、まず『五つの家族』で、メキシコの山村や地方都市、大都市の五つの家族を羅生門的テクニクアプローチ^{注2)}で描こうとした。羅生門的テクニクとは、家族をその成員1人1人の目をとおして捉えるアプローチであり、長期的で集中的な自伝をとおしてなされるものである(桜井・小林, 2005)。『サンチェスの子どもたち』は、1950年代半ば、メキシコシティの共同住宅に一間を借りて暮らすヘス・サンチェスと4人の子どもたちのライフストーリーで構成された作品である。急速な変貌をとげるラテンアメリカの大都市の下層家族の生活にうずまく様々な人間模様が、同棲、離別、仕事、けんか、セックス、刑務所、巡礼の旅などのエピソードを巡って如実に描かれる。Lewis (1961/1986, 1965/1985) の狙いは、そのような貧困や問題の渦巻く生活のなかで成長していくことの意味を家族の「内側からみた姿」で提供することであった。そのために用いた方法が、ヘス・サンチェスと4人の子供たちに、それぞれ長期にわたるインタビューを行い、ライフストーリーを聴き取り、それらを重ね合わせて提示する複合的自叙伝の方法であった。サンチェスの子どもたちのライフストーリーは、いずれも痛々しさに満ちている。嫉妬や疑念、裏切りへの憎しみ、狂気にみちた語り、絶望、それらの感情がもつれ

あい、家庭内の不調和が高まる様子が克明に描かれている作品である。ただし、Lewis の分析はなされない。Lewis の意図は、語った個人の、家族全体の、そしてメキシコの下層生活の多様な層に関する累積的、多面的、パノラマ的な展望を得ることにあった。

5. 慢性的危機状況におかれた家族のストレス研究

5. と6. では、第1軸のうち、個々の家族の構造・機能・関係性・システムを明らかにする研究を概観する。これらの研究は、主に心理学のパラダイムに依拠している。社会学における家族研究とは異なり、ミクロな視点から、個々の家族の特徴を、構造的、動態的に捉えようとする。心理学はおおむね個人の心理を解明するために発展したため、家族に関心を示すことは概して少なかった。山根(1971)が指摘するように、心理学における家族の存在は、研究目標に照らした副次的な対象として扱われがちなものであった。

図1中、第4象限に位置する家族研究の1つに、米国を中心に展開してきたストレス状況下にある家族ストレス研究がある。家族ストレス研究では、慢性的な危機的状況(貧困状況、また障害や病いを抱えた家族)に置かれている家族が研究の対象である。家族ストレス研究には、4つの源流があるとされる。それは、災害研究、問題家族の研究、医学・精神医学における患者の家族研究、そして家族危機の社会学的研究の4つである(岡堂, 1991)。特に、医学・精神医学における患者の存在は、医療・看護の問題として患者個人のみでなく、家族をも視野にいれて捉える必要が認識されるようになるにつれて、家族を含めた研究が行われるようになった。「患者には家族がいるのだ」という、当たり前ではあるが重要な視野が開かれた段階があったのである(岡堂, 1991)。精神疾患やアルコール依存症を対象とした精神医学領域では、家族が遺伝の媒体として語られたり、分裂病を作る母親や、夫をアルコール中毒にさせる妻といった形で病気の原因論として家族が注目される時期もあった。その一方で、障害や病いといった危機が発生することによって家族が陥る困難や衝撃を捉えようとする研究も展開している。また、ストレス源の発生に対して、家族が危機(例えば、障害や病い)を受容していく過程や家族関係(主に母子関係)の検討も進められた。社会学的な研究の流れに

ある家族ストレス論では、危機的な状況にある家族の周期、変動、役割関係の研究がなされているが、心理学における家族ストレス論では、治療の対象として家族を捉え、臨床心理学が扱う問題と考えられてきた。

家族ストレス研究の一例として、米国の“pain”^{注3)}という医学雑誌で扱われている慢性的な痛み（chronic pain）と家族についての研究を紹介する。慢性的な痛みとは、一般的に痛みが6ヶ月以上続き、伝統的な医学や外科的処置に反応しないものとされる。これまで慢性的な痛みの発生や症状に何らかの心理学の変数が関与しているのかどうかについて確認が進められてきた。設定された変数は、家族の規模、子どもの数、家族の社会経済的ステータス、初期の虐待経験を含む親との関係の質、家族成員の喪失、家族の病いや痛みの出来事、患者と家族成員の痛みの分配と痛みへの応答、家族成員のうつなどであった。1950年から60年代には、精神分析理論に依拠した研究が進められ、早期の家族関係において痛みのもととなる心因を発見しようとしたのである。それは、例えば、次のような問い―慢性的痛みにおいて家族は原因となるのか？家族は痛みの症状と行動の維持に影響するのか？慢性的痛みが家族に与える影響はなにか？痛みと家族に関連する要因はいかに査定されるのか？慢性的痛みをもつ患者の家族は治療に関わるべきか、関わるとすれば、どのような関わりが求められるのか？―であった。痛みや症状の進行については、初期の研究では、もっぱら個人内のプロセスとして概念化されたが、最近の研究では、長期的な痛みの発達を導くのは、個人間のプロセスであることが強調されている。

6. 家族心理学と家族発達段階論の展開

図1中、第3象限に位置するのは、1980年代に心理学における1つの学問として認められた家族心理学研究である。家族心理学は、第2軸上では、安定した状況（一時的な葛藤や問題状況を含む）にある家族を対象とした研究である。家族心理学の研究課題は、個人を家族や社会から切り離すことなく、所属する家族システムや社会システムの一員とみなし、そのシステム内の人と人との関係及びシステム間の関係を重視しつつ、システムズ・アプローチによって家族への心理的援助と教育を行うことである。家族心理学は、学際的

な分野でもあり、臨床心理学をはじめ、発達心理学、教育心理学、社会心理学との関連があり、それぞれの領域において家族にかかわる心理学的諸現象が研究される。具体的には、親子・きょうだいなどの家族内の関係、結婚や離婚に関する心理―社会的な事柄、家族の形成・発達・崩壊などの家族心理過程（family process）が研究課題となる。家族心理学において、家族は、力動的で多面的な全体として捉えられ、また、時間の経過とともに変化するシステムとして、生涯発達の観点から取り組まれている。家族ダイナミクスとは、家族の人々の間に生じる心理社会的な交わりにみられる力の関係をさすが、一般に家族ダイナミクスは結婚に始まり、時とともに変動しながら、一定の経過、すなわち家族心理過程（family process）をたどりながら変化するものとされる。

1960年から1980年にかけて、家族を「全体としてまとまりのあるもの（family as a whole）」と見るよりも「1つのシステム（family as a system）」とみなす考え方が家族研究の新しい地平を切り拓くこととなり、システムズ・アプローチが開花した。具体的には、Haleyによる家族システム理論やMinuchinによる構造家族理論といったシステムズ・アプローチが隆盛した。この時期に、システムズ・アプローチに関する諸理論の統合と家族心理学が確立された。しかし、家族の構造や機能の分析だけでは、変化する家族の心理過程を十分に把握することはできないとして、次に、家族発達段階に関する理論が確立された。これは、家族時間とも呼ばれる家族独自の発達の変化過程としてのライフサイクルをみる立場である。家族発達段階論の前提は、すべての家族は一定の初段階を経過して発達するというものであり、この前提によって家族への心理社会的な介入が可能となる。家族発達段階論は、対象の家族が現在どの段階にいて、どのような問題に取り組んでいるかを示す家族アセスメントの基準となるものである。家族発達に関連が深い概念には、社会学の分野における家族ライフサイクルの理論がある（第2象限）。

戦略的家族療法学派のHaleyが、家族心理過程あるいは家族発達（family development）の初段階を最初に示した。Haleyによると、家族は発達の過程を歩んでいくものであり、この過程が妨害されると、悩みや心理面の症状が現れるという。心理学的にみると、家族

発達各段階にはその段階固有の生活現象があり、すべての家族成員に適応と変化を求める新しい課題がある。これは、家族にとって危機となることがあり、その場合には緊張と動揺が生ずる。家族は課題に取り組みながら、再組織化することで、安定した状態に達することができると考えられている。

7. 家族ナラティブ研究と家族システム

図1中、第3象限ならびに第4象限をまたいで位置する家族ナラティブ (family narrative) に関する研究を概観する。家族ナラティブ研究は、安定状況から慢性的な危機状況におかれた家族を対象とした研究であり、家族による意味生成のプロセスや組織化されたナラティブの構造の解明を目指している (Fiese, Sameroff, Grotevant, Wamboldt, Dickstein, & Fravel, 1999)。

これまで、重要な心理過程を映し出すとされた個人のナラティブへの関心は高かったが、家族間におけるナラティブの構築への関心は薄かった。しかし、ある個人のナラティブについての研究は、家族のナラティブの研究に直接応用される可能性があるという。家族ナラティブ研究では、家族ナラティブが家族関係や家族機能の指標としていかに役に立つのかというテーマが扱われる。Fiese et al (1999) は、家族ナラティブについて3つの次元—ナラティブ一貫性、ナラティブ交流、関係の信念—を想定し、家族ナラティブを、家族の出来事についての一貫した詳述を作り出すプロセス、家族成員間での情報の交換、そして、家族の経験への意味付与が合わさったものと提案した。そして、人間発達、精神医学、家族療法とシステム理論といった多様なパースペクティブから、世代を通じた家族心理過程の連続性と不連続性についての仮説を検証し、いかに、家族が家族の経験を語るナラティブを通じて自分たちの歴史を作り出していくのかを検討している。

家族ナラティブは個人を超えたナラティブである (Fiese & Sameroff, 1999)。家族ナラティブによって、家族が世界を理解する仕方や家族の交流のルール、そして家族関係についての信念の生成を扱うことが可能となる。ナラティブは、個人のアイデンティティの側面を反映するだけでなく、家族の重要な関係的側面を反映するとみなされ、家族関係を表す1つの指標として取り扱われる。Fiese & Sameroff (1999) は、家族の

ストーリーを語ることは、家族が社会的交流を調整する1つのやり方であり、関係の表象が世代を通じて継承していく方法でもあると述べ、親密なカップルの形成、家族儀式、養子縁組、両親の病いが家族に与える影響など多様な家族心理過程を研究した。また、Reiss (1981) らは、家族成員が共有している社会的世界における秩序、公平性、首尾一貫性、新奇性や、この社会的世界に関連して彼ら自身についてもっている考え (ナラティブ) に依拠して、家族パラダイムや家族アイデンティティを概念化した。

また、家族ナラティブは、家族の出来事への意味生成プロセスも明らかにする。家族における意味生成は、慢性的な病い、子どもの誘拐や謎の失踪のようなストレスフルな状況における家族の適応に関連している。家族が危機的状況に直面したとき、家族がいかに自分自身を再構成するのかについて、家族の内側の視点から理解を深める必要があるという (Patterson & Garwick, 1994)。さらに、家族の意味生成は危機的状況のみならず、青年期のアイデンティティの発達や関係形成 (Fiese, 1992) のような通常 (危機的ではないという意味) の家族発達における移行点とも関連している。

家族ナラティブが家族にもたらす機能として、家族信念システム (family belief system) がある (Rolland, 1994)。Fiese & Sameroff (1999) によれば、我々は家族や他のシステムの一部として、自分自身の行動パターンを形成する信念システムを発達させる。家族信念システムは家族の生活に一貫性を与え、過去、現在、未来の間の連続性を促進し、突然降りかかる深刻な病いといった曖昧な状況にアプローチする手立てを与える。家族信念システムは意味を持っているのであり、家族の意味システムが一貫していれば、家族の生活はよりよくなるとされている。なぜなら、家族信念システムは、家族が環境における出来事や行動の解釈の仕方的形成し、決定と行動を導く認知地図の役割を果たすからである。例えば、ある家族が、突然家族に降りかかった病いを解釈し、意味づけ、健康を模索する行動をいかに導くかということに家族信念システムは影響するのである。家族信念システム論では、個々の家族成員がそれぞれ持っている信念よりも、家族がユニットとして所有している信念システムが重視される。

一方、家族成員の経験についての一人称の説明を重

視する立場もある。これは先述した Lewis (1961/1986, 1965/1985) の複合的自叙伝のアプローチに近く、このアプローチによって家族成員の出来事の見方へのずれが浮き彫りにされ、我々の家族理解が促進されるといえる。ここまで述べてきたように、家族のナラティブへの着目は、それまでの家族研究における家族の扱われ方や見方を転換させ、家族の意味システムに接近することを可能にしたと結論付けることができよう。

8. まとめ：家族へのナラティブアプローチの有効性

本稿では、医学（精神医学）、心理学、社会学の分野における家族研究をレビューし、明らかにすべき現象（第1軸）と研究対象となる家族の状況（第2軸）という2つの軸から各研究を分類することを目的とした。そして、作成された図から浮上した4つの象限について、各研究のアプローチ方法や研究内容などの特徴を述べた。まとめでは、湧井（2006）および荘島（2008a, 2008b）で行った家族へのナラティブアプローチとの相違を明確にするために、4つの象限に見出された諸研究（特に心理学研究領域）との比較を行い、家族へのナラティブアプローチの有効性を論じる。

湧井（2006）および荘島（2008a, 2008b）において実践された家族へのナラティブアプローチとは、1点目にAを中心とした病いの物語（Aが性別や身体に持続的な違和を感じ、望む性を生きようとする）とそのものや、そのような生き様を巡って家族との間で葛藤が生じる状況についての物語）を家族成員による多重のパースペクティブから描写することであった。このアプローチは、本稿で取り上げた他の家族研究における諸理論と根本的な相違がある。相違を理解するための鍵概念として、因果論モデルの非重視、欠陥モデルの非重視、理論トップダウン型モデルの非重視、意味づけの重視が挙げられる。

まず、因果論モデルの非重視については、家族ストレス論に対する抵抗がある。家族ストレス研究では、家族に降りかかる危機的な出来事を家族にとってのネガティブな出来事と固定し、独立変数として扱う。その変数に対して、危機に反応する家族の状況が従属変数となる。ストレスとストレスターの関係のように、原因と結果は切り離されて考えられ、因果関係として説明される。また、因果論モデルは、家族がストレス

に耐えられるかどうかといった基準で、強い家族と弱い家族とを振り分ける。そして、弱い家族は何らかの欠陥を持っているものとみなす欠陥モデルと密接に結びついている。この傾向は性的少数者の家族研究にも共通している。例えば、性的少数者の家族は離婚家族が多いといった研究報告（山内・庄野・加澤, 2001）がそれである。家族ストレスに関する問題は、医学や心理、福祉領域における家族支援を想定しているため、因果論や欠陥モデルとして容易に語られやすい。

しかし、湧井（2006）や荘島（2008a, 2008b）は、はじめから家族支援を念頭におくのではなく、家族の経験を家族の視点に立って捉えようとして行われた研究である。家族と病いは、切り離して因果関係で説明されるのではなく、互いのコンテクストになっていると認識する必要がある。ここに、個人の意味づけの重視との接点が見出される。例えば、家族ストレス論では、家族に降りかかる出来事をネガティブなものとして固定的に捉え、家族のストレスや衝撃などの反応を数値で表す。しかし、ナラティブアプローチでは、家族が出来事を意味づけるプロセスに着目する。家族は出来事に対して、ネガティブでもありポジティブでもあるという矛盾する意味づけを行なうかもしれない。相容れない意味づけを包摂するのがナラティブアプローチである。さらに、ナラティブアプローチでは、出来事への意味づけの変容プロセスにも着目する。家族を逆境へと陥れた深刻な出来事が、後から肯定的なものとして捉えられることは珍しいことではない。

次に、ナラティブアプローチとシステムズ・アプローチに依拠した家族研究を比較する。例えば、システムズ・アプローチによる心身症患者の家族についての研究（例えば、Grolnick, 1972; Meissner, 1974）からは、

(1) 家族と心身症はそれが研究されるコンテクストによって結果が変わること、(2) 心身症は、家族システムのなかでシンボリックかつコミュニケーション的な機能を持つことが明らかにされた。さらに、(3) データは対象となるものの特徴を報告することによってゆがめられるため、(4) 家族に影響を及ぼす出来事の因果関係の重要性を評価することは難しいとされる。上記の結果から、システムズ・アプローチは因果論モデルと一線を画していることが分かる（シンボリックかつコミュニケーション的であると明言されている）。システム

ズ・アプローチでは、個人の意味づけよりも危機的な出来事によって変化する家族のシステムや構造の究明に関心が向けられる。システムズ・アプローチは、家族を病いに影響を受ける全体的に調和を保つシステムとみなし、家族間の交流が問題の維持に貢献しているという仮説をこれまで一貫して生み出している^{注4)}。しかし、人が危機的な出来事に対して意味を付与し、物語ろうとする行為それ自体も、検討に値する個人の対処行動であろう。援助のあり方を模索する研究であれば、なおさら当事者の「主観的な認識や言説に依拠することなしに戦略について述べることは望ましくない」(高橋・古賀, 2004)と考えられる。

家族の意味システムや信念システムを探索した家族ナラティブ研究は、湧井(2006)および荘島(2008a, 2008b)における家族へのナラティブアプローチと近似しているように思われる。家族ナラティブは、家族の交流の規則や家族の関係性についての信念であり、家族の関係や機能を測る指標として用いられる。一方、家族へのナラティブアプローチでは、個々人の語りを聴き取ることによって経験についての物語の多様性を浮かび上がらせ、家族成員それぞれの人生における意味づけを描きだす。それに対し、家族ナラティブ研究では、家族成員が家族について持っている家族ストーリーに焦点を当て、それが家族の意味システムや信念システムを形成しているとされ、家族ナラティブが家族の関係性にいかに作用するかという点に焦点がおかれる。家族ナラティブ研究では、個々の家族成員が出来事に意味づけるプロセスや意味づけられた個々のナラティブではなく、家族が集団として所有している家族についての信念システムを重視するのである。

最後に、家族社会学における重要な知見である家族ライフサイクル論を引き合いにして、理論トップダウン型モデルの非重視について説明する。家族ライフサイクル論では、個人が生涯にわたって経験する役割移行の過程を社会・歴史的な時間との関わりで捉え、モデル化した。1950年から1960年代までは家族が比較的均一な様相を示していたために、一般的特徴として家族ライフサイクルが通用していた。しかし、家族の多様化が進み、実情に合わなくなってきたことから個人に焦点化するライフコース論へと変化していった。家族へのナラティブアプローチでは、家族ライフサイ

クル論のように研究者がトップダウンに家族の発達段階や人生イベントを設定しない。ナラティブアプローチは、家族成員の語りから、家族にとって重要な出来事をボトムアップに掘り取ることができるアプローチである。特に性的少数者のいる家族といった社会的に少数家族の実情や経験を把握するためには、家族がどのような出来事をどのような時間の流れの中で経験し、生きてきたのかを把握する必要があるだろう。この点において、Lewis (1961/1986, 1965/1985)の羅生門的手法および複合的自叙伝の方法は有効なアプローチと考えられる。

9. 展望

本稿では、家族を捉える様々な視点や理論について概観した。いずれの視点に拠るとしても、見過ごしてはならないのは、目の前で生活している家族成員をいかに描き出そうとするかという研究者の主観や想い、経験が家族へのアプローチを選択する際に反映されることであろう。生起している現象と、それを捉えるための方法論は、一組のセットとなっていることを忘れてはならない。現象はそれをみるフィルターを通してしか立ち現われないのである。したがって、視点や理論の優越を問題にするのではなく、目の前の現象をいかに捉えるかという研究者側の主観を内省したうえで、アプローチを選択することが肝要である。

また、研究という営為を通じて研究者は、現場に積極的に働きかけ、常に何らかの方向性や視点を作り出し続ける存在である。研究者自身に立ち現れる世界を振り返り、その世界を読者に提示し、対話することが求められよう。

注

- 1 Aは、医師からも「性同一性障害」と診断を受けている。
- 2 「羅生門」という用語は、芥川龍之介の「藪の中」を原作とした「羅生門」という映画に由来する。1人の男の死を巡って3人の人間による証言の食い違いが発生するというストーリーから、1つの出来事を巡って相容れない知覚、物語が存在することを「羅生門」と言い表すようになった。
- 3 “pain”は米国のジャーナルである。ジャーナル

情報を下記に示す。

ISSN: 0304-3959 Imprint: ELSEVIER
Commenced publication 1975 Subscriptions for
the year 2009, Volumes 141-147, 21 issues
Membership subscription applications should be
sent to the International Association for the Study of
Pain (IASP), 111 Queen Anne Ave N., Suite 501,
Seattle WA 98109-4955, USA. Tel: 206 - 283 - 0311
Fax: 206 - 283 - 9403

- 4 例えば、痛みと家族に関する次のような仮説である (1) 家族は、ある特性をもつホメオスタティックなシステムとして行動する、(2) 家族は、痛みに関する行動の強化子として行為し、常に痛みを教育する、(3) 痛みの症状は、家族成員をコントロールするために使われ、それがコントロールする装置として成功した場合、維持される、(4) 家族は、個々の家族成員に生理学的な影響をもつ社会的なコンテキストである。

文献

- Fiese, B. H. (1992). Dimensions of family rituals across two generations: Relation to adolescent identity. *Family Process*, 31, 151-162.
- Fiese, B. H., & Sameroff, A. J. (1999). The family narrative consortium: A multidimensional approach to narratives. In Fiese, B. H., Sameroff, A. J., Grotevant, H. D., Wamboldt, F. S., Dickstein, S., & Fravel, D. L. (Eds.), *The stories that families tell: Narrative coherence, narrative, interaction, and relationship beliefs* (pp.1-36). Monographs of the society for research in child development, 64(2).
- Fiese, B. H., Sameroff, A. J., Grotevant, H. D., Wamboldt, F. S., Dickstein, S., & Fravel, D. L. (Eds.). (1999). *The stories that families tell: Narrative coherence, narrative, interaction, and relationship beliefs*. Monographs of the society for research in child development, 64(2).
- Grolnick, L. (1972). A family perspective of psychosomatic factors and illness: A review of the literature. *Family Process*, 11, 457-486.
- Lewis, O. (1986). サンチェスの子供たち—メキシコの一家族の自伝. (柴田稔彦・行方昭夫, 訳). みすず書房. (Lewis, O. (1961). *The children of Sánchez: Autobiography of a Mexican family*. New York: Random House.)
- Lewis, O. (1985). 貧困の文化—メキシコのく五つの家族>. (高山智博・宮本勝・染谷臣道, 訳). 思索社(現, 新思索社). (Lewis, O. (1965). *Five families: Mexican case studies in the culture of poverty*. New York: New American Library)
- Meissner, W. W. (1974). Family process and psychosomatic disease. *The International Journal of Psychiatry in Medicine*, 5, 411-430.
- 岡堂哲雄. (1991). 家族心理学講義. 金子書房.
- Patterson, G. R., & Garwick, A. W. (1994). Levels of meaning in family stress theory. *Family Process*, 33, 287-304.
- Reiss, D. (1981). *The family's construction of reality*. Cambridge: Harvard University Press.
- Rolland, J. H. (1994). *Families, illness and disability: An integrative treatment model*. New York: BasicBooks.
- 桜井 厚・小林多寿子. (編). (2005). ライフストーリー・インタビュー. せりか書房.
- 莊島幸子. (2008a). トランスジェンダーを生きる当事者と家族: 人生イベントの羅生門的語り. 質的心理学研究, 7, 204-224.
- 莊島幸子. (2008b). 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程: 自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討. パーソナリティ研究, 16(3), 256-278.
- 高橋幸三郎・古賀成子. (2004). 障害者家族の生活困難に関する研究. 東京家政学院大学紀要, 44, 75-84.
- 湧井幸子. (2006). 「望む性」を生きる自己の語られ方: ある性同一性障害者の場合. 質的心理学研究, 5, 27-47.
- 山根常男. (1971). (編訳). 家族の社会学理論. 誠信書房.
- 山内俊雄・庄野伸幸・加澤鉄士. (2001). 性同一性障害の心理的側面. 臨床精神医学, 30, 751-756.
- (博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)